

光明

第十三卷
第二號

光明團本部發行

大正
日本

大正十四年七月一日
昭和六年二月十五日發行

便覽
日發行

光明

第十三卷第二號

定價一部十錢

大正十四年七月一日
昭和六年二月十五日發行

光明

第十三卷第二號

巻頭の叫び

合掌宣言

- 一、我は之れ久遠劫來の業苦に憐む。されど傷つき痛み憐める魂の底深く探る時、其處に洞徹し給ふ如來の光明を仰ぎ、永遠に救ひ給ふ大悲の勅命を聞く。
- 二、我はこれ曾無一善唯一作惡の凡夫。如來はこれ若く不生者不取正覺の本願力に生き給ふみ親、罪惡深重煩悩熾盛の我を其まゝ救ひ給ふ。
- 三、愚まれたる隣人も亦、久遠の業苦に悲泣する慘ましき輪廻の旅人、知らせん哉。彼の内に流れ給ふ永遠の光明、聞かせん哉。下方に響流し給ふ招喚の勅命を。
- 四、希くば自力の我の迷妄を破し、み光にはからはれて無我報謝の歡喜に生きん。
- 五、「四海の信心の人は皆兄弟」其處に共存の涙わく。共に和らぎ慰藉し、策勵して相愛に生きん哉。

本 領

毀譽褒貶に動するなかれ。逆境に失意する勿れ。順境に驕るべからず。名利に迷惑する勿れ。念佛一道に精進せよ。

救はれたる者は立つて、全人類救済のために、熱き血と涙を以つて、念佛報謝宣傳のために濁亂の社會に猛進せよ。

暗黒をなげくよりも、汝の内に智慧の燈を揚げよ、

冷たき心、怒の情は、汝を地獄の底に滅ぼす。

道は横臥して幻想を弄ぶ者に開けず。

斷然起つて行へ、斷じて行へば鬼神も避く。

▲智を磨け

▲情をやはらげよ

▲意志を強くせよ

斷じて行ふ意志なきものに偉大なる人生なし。愚かなる者に明るき人生なし。

溫き心情なき者に樂しき人生なし矣。



両足尊

住岡狂風

幽霊

幽霊には足がありません。

理想に燃ゆる未来を持ちません。

暗い過去に囚はれてゐます。

愚痴と呪咀と怨恨に動いてゐます。

現代の幽霊は決して暗の夜の柳の下に出るにはきまつてゐませぬ。

畫の眞唯中、大都會の繁華な巷を美しい衣服をつけて動いてゐます。

我等は何を目して幽霊といふか。

先づ自律の世界にゐないで、何事も他のなにものかによつて動いてゐる人を幽霊だと申します。あなたはなぜさうしますか。かうしないと叱られますから。親に、兄に、先生に叱られますからとて叱られないやうに動くのです。あなたはなぜ自分の意見通りに行ひませんでしたか。世間がやましく申しますから、いや輿論が反對でしたから、いや私の意見を言張ると不利な立場に立ちますから、さうした理由で、自分は正しい意見を持ちながらも、心では残念でたまらないのに、皆に随つておくのです。かうした人間が八方美人であります。八方美人ほど美しくさうで嫌なものはありません。力にも頼みにもなりません。

かうした人たちは、輿論が湧いて來なければ、たとひよいことであつても實行しません。何よりも世間の無意味な反對をおそれます。世間の聲を聞いて自分を培つてゆくといふのではなくて唯無意味に世間をおそれるのです。この人を動かしてゐるのは、自分の衷心の聲でも願望でも、意志でもなくて、それは世間でありまうす。

かうした人は、たとひ『善』いことをしてゐても、自分がしたのではなくて、文樂座の人形芝居にすぎません。

かうした自分を自分で生きてゐないで、何事も他人によつて動いてゐる人を『無道義の人』とよびます。よいことをしてゐるやうでも、美しき幽霊であります。

人生で一番重大事であるところの結婚などでも、娘は嫌でたまらないのを親の権力で無理に強制して、それに服従しない娘を不孝よばはりをし、泣き／＼でも親の無理を通した時『孝行者』だといふ親があります。勿論、子供の我まゝや我慢を道だといふのではありませんが、権力に泣き／＼服従するのが決して孝行ではありません。自分を眞に生かすのが孝なのです。私は決して妹たちを『かたづけ』ません。一生家にゐたつて恥だとは思ひません。彼等が衷心の願ひのまゝに獨立して歩む人に自らを育てゝくれることを願つてゐます。

人間は案外お人好であります。ですから人のおだてにのります。ワイ／＼はやしたてられるとつい有頂天になつて騒ぎはじめます。おだてられて動いてゐた者は、おだてる大衆がゐなくなると、ぱつたり火が消えたやうにやめてしまひます。人をおだてるのもよくないし、人におだてられて躍

るのも人形です。幽霊の一種にすぎません。

先月号では、九星判断や、現世祈禱や、方角の善悪、日の吉凶、運命を左右する神や、さうしたものによつて生きる人のことをやかましく云つておきましたが、人間は好運の時は案外強いのです。が、不運や病氣や禍が続くとつい運命論の幽霊になつて、迷信に走つてゆきます。苦のどん底におとして見ると其正体を曝露します。

釋尊は兩足尊であります。一切のかうした世界をふみ破つて、眞の獨立者として兩足によつて立ち歩きたまふ尊き人であります。我等は限りなく、兩足尊にあこがれ、歸命隨喜せずにはゐられませんが、

この獨立者の天地を説き、歩むべき佛教すらが、何時のほどにか世俗の迷妄に妥協して、盛におみくじを出したり、現世祈禱をやつたりして、佛教本來の面目を棄てゝゐます。眞宗を除いた他の全てがこれであると云つてもいい程であります。こゝにおいて親鸞聖人は、

『五濁増のしるしには この世の道俗ことごとく 外儀は佛教のすがたにて 內心外道に歸敬せり
かなしきかなや道俗の 良時吉日えらばしめ 天地神祇をあがめつゝ 卜占祭祀つとめとす
かなしきかなやこのごろの 和國の道俗みなともに 佛教の威儀をもとゝして 天地の鬼神を尊
敬す。』

と悲歎せられるのであります。愚かにして弱きものが、人格獨立の王座を捨てゝ、はてしなき無
明界に流轉するのであります。

宗教の人格的意義

宗教は決して我等が他律の世界、幽霊の世界に流轉することを許しませぬ。自覺を以て外に宗
教はありません。

釋尊は天上の聖なる佛格の上に立つて『天上天下唯我獨尊』を叫びました。

親鸞は大地に合掌して、人間性のどん底を諦観して『愚禿』を名告りました。

二尊は全く相反する態度を持ち、相對する意識を持ちながら、しかも兩極相一致し、其根本に

おいて同一の生命に生き、同一の信念に住し、同一の純粹行に生きたまふてあることを明かに説い
たものが、大無量壽經であらねばなりません。

宗教はそれが人格的な意味においてのみ、其意義を持つ。

我等は先づ無道義の世界から、道義の世界、自律の世界に移らねばならない。

さうして更に高次の立場からの批判と洗練とを受け入れて、純粹なる願の上に生きねばならない
親鸞聖人は信の世界を表白して『自然法爾』と云はれた。これ道義自律の世界を更に超えて、全
一なる生命に輝き、究竟的態度、全人的生命愛に燃焼せられた世界の表現せられたる唯一の文字で
あらねばならぬ。

まことに如來は智慧によつて生死を超えて理想の淨土、至純絕對の彼岸に立つて一切衆生を招喚
したまふてある。眞實の眞實、善の善、美の美、普遍、永遠、平等、一なる光明の世界である。

南無阿彌陀佛とは、實にこの理想の彼岸より招喚したまふ如來の名告であり、其救濟意志の表現
である。

彼岸の光明は生死現實を、限りなく否定する。この否定の現實のどん底に動くものは純粹なる願行である。如來の本願がそれである。如來の本願力とは、實に大地に念ずる如來の大悲である。如來は彼岸に招喚しつゝ。現實の生死にわけ入つて無明の生死界に働き、念じ、誓願する。彼岸にあつては名號と云ひ、現實にあつては本願といふ。

如來の願心は衆生の、大信となる。願と信とは一体である。この信が外へと發展しては衆生の大行となる。大信大行ともに、佛心の廻向顯現である。この久遠の眞實の廻向顯現によつて、衆生はあらゆる迷妄より覺めて、この唯一の彼岸に行歩し、本願の大道を現實の生死界に發見する。

かくして衆生は淨土へと生きて往く。往生とは欲生我國することであり、願生彼國することである。人格的意義におけるこの往生は、獨立人格の内面的發展の過程であり、人格創造の道程である。若し多くの誤れる求道者の如く、往生を功利的な、低き人間の慾望の延長と取るならば、彼岸に往生するとは、地理的移動にすぎないことになりおはる。然し經典は『教説』であつて『地理書』ではない。

若しそれ淨土教がこの人格的、理想主義な意味をすて、低級なる自樂の満足であるかの如くとられたる現在多くの信者たちの如きものであるならば、如來は遂に『兩足尊』であり得なくなり、衆生はあらゆる迷妄にさめずして、念佛と云へども依然たる幽靈界のたはごとにおはるであらう。ここに我等は限りなく、兩足尊に合掌し、歸命する。然しそれは些の欲の満足のためではなくて善惡の此岸を越えて、理想の彼岸に願生せんがためである。(つゞく)

千年支部第一回講習會

一、期間 二月二十日より二十二日迄

一、講師 主管住岡先生

一、會場 沼隈郡千年村常石寶田院

一、行事 講習科目 歎異鈔(晝間) 一般講演(夜間) 娛樂 歌留多會、懇談茶話會、

一、會費 五十錢他に教科書代十錢(歎異鈔御持の方は御持參下さい)

一、申込 二月十五日迄に支部へ

一、宿泊 御遠方で宿泊の方は一泊三食付五十錢にて御世話します申越しの時お知らせ下さい

一、食事 御都合により食事のみ御取りの方は一回十八錢、食前三時間前に中込みのこと、

河内支部の創始者

一中學生の至心

それはまだ本部が南竹屋町にあつた頃のことである。

今日はまた次ぎから次ぎとお客様の多いこと色々な相談や、用事で訪問客が一しきりきれて、ぼつとした時、又お客様ですとのこと、誰だらう？ 然しそのお客様は上に通らないで、

玄關で面會したいとのことだつた。出て見れば其處には一人の中學生が立つてゐる。

『あなたは何の用事ですか。お上りなさい。』

『私は團員の牧野でございます。』

それは實に牧野君だつた。用事といふのは、發送残りの光明をくれとの簡単なことであつた。牧野君は金貳圓を懐から出した。さうして二十冊の光明がほしいといふ。中學生！ それが二

円のお金、二十冊の光明、

『あなたはそれをどうする氣なのですか。』

『私の親しい人に配らうと思ひます。』

私は感激した。牧野君は決して金持の子供ではなかつた。私は君が、朝と夜、二種の新聞を配達して學資を得つゝ勉強してゐる苦學生であることを知つてゐた。

もう大分不景氣だつたとは云へ大正十四年の秋頃であつた。好景氣の情性で、世をあげて奢侈な風の漲つた時である。苦學生たちが景氣のいい音をたて、新聞を一軒づゝなげ入れて走る其街の二階では至る所に酒と女に幾十百金を湯水の如く使はれた時だつた。月三十円のお金を

奮闘によつて得てゐる牧野君にとつては、寶石にも等しい金貳圓であつた。私は感謝して四十冊の光明を渡した。金貳圓はかへさうかとも思つたが、深い意味でそのまゝ受取つておいた。

この四十冊の光明が何を生むだらふ？

私はふとかうしたことを興味深く考へた。

大地の上は十の眞實が十みな通るほどなまやさしい所ではない。

然し、眞實といふ眞實が最後まで全部葬られるほど暗の世界でもない。

私は今其中の一冊が何を生んだかを紹介しやう。

第二の光

間もなくたつてからのことであつた。或日牧野君は再び本部を訪れた。さうしてお願ひがありますとて語つた話はかうである。

牧野君は故郷の信仰深い女の人に光明を一冊送つた。その女の方は読みおはると更にそれを呉市で親しくなつた宇多津草枝さんに送つた。宇多津さんは鹿兒島生れで、夫と共に呉市に來られたのだが、其頃は、廣島縣病院に聞かれる産婆講習所に入學してゐた。光明はその講習所に送られたのであつた。

宇多津さんがこの講習所に入學すると三十人

彼女は『これだ！』と思つたさうしてすぐ光明を送つた友人に問ひ返してやつた。それは更に牧野君にかへつて來た。

『そんな譯で、一度縣病院に行つて頂くことは出来ませんまいか。』

といふのであつた。私はやがて承知して縣病院に行つた。それから後、赤十字社の寄宿舎や本部でこの人たちと度々語つた。

大正十四年も暮れて十五年三月この一團は卒業してそれ／＼の地に散つた。この一團の中に我が河内支部の中務みつよ法師もゐたのであつた。世に因縁ほど不思議なものはあり得ない。

足らずの生徒たちと一緒にたつて千田町の赤十字社の中にある寄宿舎にとまつて縣病院に通學するのであつた。宇多津さんは信仰深い人であつた。誰をもはぐからず、信仰の話をし、生活をした。生徒仲間たちは初めの程は『考人臭い人だ』とか、何とか云つて嘲笑した。けれども眞剣な態度と、眞面目な生き方にソロ／＼感心しはじめた。さうして一人動き、二人動かされ、遂に二十幾人が擧つて動かされた宇多津さんの仕事はふえた。誰も彼も惱みはじめた。皆に熱心な求道熱が湧き上つた時、さうして宇多津さん自身も困りかけた時、光明がその手に入つたのであつた。

念願

『先生、私はどうしても一度河内町の人たちに先生のお話を聞いて頂かなければなりません。私自身ももつとお育てを受けねばなりません。私はきつと河内町で講演會を開きます。』

『どうぞ……………』

私の返事は本氣ではなかつた。三十にも足らないうら若い奥様に、何んでそんなことが出来るやう。と頭から問題にしてゐなかつたと云つてよかつた。然し大正十五年だつた。講演會の案内が來た。私は半信半疑で日割を定めた。其日河内町に下りた。町にはポスターがはられてあ

る。どうしてこんなことが出来たのだらう。しかも堂々たる講演會である。

『かうくした先生があるのですが、一度河内町で講演會を開いて下さいませんか』

と御主人中務静磨氏にお願ひしても、光明園について何も知らない御主人としては

『お前は云つてゐるんだ！』

と叱られるのも無理はなかつた。申務氏はも海外航路の船員だつた。下河内の本宅には父上常太郎氏夫婦が住んでおられ、静磨氏夫妻は町で平和商會とて文房具店を開いておられる。

父上は毎日郵便局に出勤してゐられる。

みつよ姉の念願はどうしても折ることが出来

なかつた。狂者じみたこの願ひはいくら云つても聞入れられない。それでもやむにやまれぬ願ひであつた。

願ひは通る

かつて私が豊田郡大草村に講演にゆくため、本郷驛に下車して、自動車に乗つた時、同じ自動車に私の知つた人がある。誰だらう。それが中務みつよ姉であつた。

『あなたは何處に行かれます？』

『はい、私は大草の知人から御案内がありまして、先生の講演を聞きにまいります。』
その頃みつよ姉は大變に暗い心をもつてゐら

れた。まるで幽霊のやうな足どりの自分を見出し、たまりかねて來られたのであつた。更生！一人の人が人生の暗黒面に頭をつゝこんでもがいてゐるそれが大きな光明に直面して、内からの力に立上る。奥様はその講演限り、眞實の救ひに蘇つたのだ。どうしてもちつとしてゐられない。然し念願は通りさうにもない。こゝまで來た時、道が二つに別れる。ばつたりやめてしまはふか。でもこの願を！彼女が衷心の願ひを抱いて、舅上に頼んだ。姑上に願つた。

その眞剣さ！遂に願ひは許された。やつて見よ。すぐ青年三四名が賛成した。

會場の心配が出来た。宣傳、そして講演會、第

一回のあの盛會。反對の筈だつた主人静磨氏が講演を聞いて、その日から中心になつてのお世話、三日がすんで、皆合掌して別れた。

それが我が光明園河内支部の發端である。

往けこの道！

星霜流れて六年、時に消長盛衰はある。然し五年續くためには、その裏には、念じつゞけてゐる親にも似た、努力の人がある。中務氏夫妻、それこそ六歳になつた支部の親である。わけても母として生んで育てた、みつよ法姉の熱と愛、母親が子を思ふやう、來る日も來る日も一日として支部の發展が頭から去る日はあるま

あの敬虔な、親切な、奥様！

体はほつそりと虚弱に見える、あの上には、法藏菩薩の誓願の全てが力となつて、強い人として生きしらしめたまふのである。

念願は人格を決定す。経緯は力なり。

河本要氏、満井氏、その他多くの中堅人物が生れて、河内支部はこれから眞の活動に入らうとして東西に其枝葉を延ばさうとしてゐる。

女は弱し。果して然るか弱いとは何を云ふ？念願の凝る處、新たなものを生む。能はざるにあらずして、爲さざるなり。

毎年秋十月、茸とお栗のある頃には河内支部

『願くばこの功德を以つて、平等一切に施し、同じく菩提心を發して、安樂國に往生せん。』
往け此の道！ 燃えよこの願ひ！ 全國聖戦線上の闘士たち！

× × × × ×

過ぎし日を省みて

中務みつよ

過去二十九ヶ年間の永い間生のびさせて頂いたことを感謝いたします。憶へば十歳の昔、生母の懷を離れて窓學より一足飛びに家庭の人となりました。體格虚弱のために自分としては可成り過度な肉体的苦しみを受けました。暫くにして一身上の都合により出廣勉學の途につくこ

の大會がある。中務のお母様はお栗の入つた甘いおすしを作つて持つて来て下さる。

『先生、いい嫁を恵まれて、私は幸福者でございます。』

『先生、私はいいい母様のもとに来て幸福者でございます。』

この嫁と、この姑、

『養藏の嶺のみみじの亂れけり

猿の群のおそひ來し朝』

養藏山、深山公園、あの美しい山河の間にはさまれた河内町を憶ふ時、ここに念佛の一家を念ふ。

第二第三の中務みつよ出でよ！

となりました。同じ學友宇多津クサエ法姉により住岡先生にお會ひすることができました。終學販郷いたしましてよりは、日一日と暗黒の深淵に沈みゆくのみでした。心身共に疲れはて、見るかげもない哀れな瘦せおとろへた肉體のみが、毎日幽霊のやうにフワリ／＼と動いてゐるのみでした。

この苦惱のどん底に販郷以來お目にかゝらなかつた先生にお會ひすることが許されました。ほど嬉しいことはありませんでした。泣いて泣いて涙さへなくなつた荒れきつた、氷のやうな心は先生の温きみ心によつてだん／＼と解れてまいりました。生きる力がなくなつて死が私の全部の解決のやうに思つておりましたが私が以前とちがつて生に力を得て少しづつでも明るい氣持で歩ませて頂くやうになりました。

しみ／＼私の過去を考へます時、戦慄の思ひ

がいたします。私一人生きてゐるために、あまたの人の平和を破り血みどろにし、自分自身の立場のみ考へて周囲を自暴にさせたのは皆私の恐ろしい業報だつたのです。私に一番近い人を一番ひどく苦しめました。鬼にしました。それからだん／＼と多くの人を地獄へ／＼とつれ行きました。

周囲が私を苦めるやうに思つてゐたのは全て間違ひでした。私を苦しめるものは私でございました。過去の報ひで私はどんなひどい目に會つてゐてもよい筈ですのに私の現在には余りにも恵まれすぎてゐます。

又しても／＼つまづきの多い自分を情なく思ひます。『過去世の業報なればどんな苦しみも甘んじて受くべきが當然である。禍福共に私のものが私にきたのである。』と云ひつゝ、いよいよ實際生活になると直にその言葉は裏切られ

て三毒の煩惱に全て自分を占領されるのです。なんと浅ましい自分でございませう。心苦しさに堪えられません。

これだけあてにならない心でまだ何か対象物をしつかり握りしめてあてにしやうといたします。あてになるものは一物としてございませぬです。噓です。全てが噓です。あてになりません。如來のみが誠に在はします。凡てを如來にお任せさせて頂きます。力一杯精進させていただきます。

畜生界を眺める時私は人間として生れさせて頂いたことを感謝いたします。そしてこの遇ひ難い尊い民法に遇はして頂いたことは何より喜ばしいことでございます。若し先生にお會ひする以前にあの煩惱のみにたゞれきつて泣く時に死んでゐたら……………と精神病者にでもなつてゐたら……………と思ふ時歡喜の念

赤い火は燃ゆる

涙泉

燃えた！ 不正な！

一ぱい投げ捨てた芥溜から

眞赤の火が……………

燃えた！

ばばば 燃え揚がつた

ちんちん

カン／＼／＼

不正で固めた鐘が鳴る

ヒイ／＼／＼

灰色なポンプがとぶ

矛盾にみちたごろ水をとばす

正義の火は消ぬない

根強くます／＼燃える

不正で固めた城壁を

燃え盡くさんとして

更にまたとなりへ

に堪へられませんか。み佛様は先生をして私を私として知らしめました。先生は私の大善智識です。命の恩人です。先生の御恩は如來大悲の御徳と共に骨身を碎いても謝すべき筈ですのに永劫かゝつても万分の一の報恩も出来ませんのみならずより一層お苦しめするばかりで相濟まぬことでございます。

次から次へ現はれて来る恐ろしい業報の中に

今はほそ／＼ながら微笑まして生きて喜びを中心から感得させて頂きます。お役に立てばこの體をみ法のため使いたいと存じます。先生は法戦にお立ち遊ばして御奮闘遊ばします。とるに足らぬか弱き女性なれどもあらん限りの御手傳ひをさせて頂きます。

XXXXXX

XXXXXX

佛說無量壽經

五惡段講話

十七

(本文)

(五惡段講話はもと聖光にのせて來たものであります。つゞいて光明にのせます。)

佛言其五惡者、世間人民徒倚懈惰、不肯作善治身修業。家室眷屬飢寒困苦。父母教誨瞋目怒聲、言令不和。違戾反逆。譬如怨家。不如無子。

(讀方)

佛のたまはく、その五惡とは、世間の人民、徒倚懈惰にして、あへて善をつくらず、身を修め、業を修せず。家室眷屬飢寒困苦。父母教誨するに、目を瞋り、怒りてこたふ。言令不和にして違

戾反逆す、譬へば怨家の如し。子なきに如かじ。

(大意)

第五の惡といふのはかうである。此世の人々は徒倚(こゝろおちつかず、たちまはること)懈怠であつて、少しでも善をなし、身を修め、仕事をなさうとしない。それがために一家眷屬が飢え、凍えて困り苦しむ。これではいけぬと父母が教へたとせば、かへつて目を瞋らし、怒つて口ごたへをして、違戾反逆とて、親子の間が仇敵のやうになる、親はそのためかやうな子なれば、むしろない方がいいとさへ思ふ。

講話

懈怠

『世間の人民徒倚懈怠にして』

あへて、善をなし、身を治め、業を修せず、

家室眷屬飢寒困苦す。」

二人の兄弟がある。

弟は小學校の教員である。

兄は大きな家と可なりな財産を概から貰つて樂に暮してゆける身の上であつた。

然し兄は仕事嫌だつた。そして贅澤が好きであつた。何もしないで遊び暮した。彼は村會議員にもなつた。山や畑が人手に渡る頃になると、そろ／＼借財がこの男を苦しめ初めた。それでも彼は仕事をしやうとはしなかつた。村ではヤクザ者扱ひにされはじめた。財産が全部無くなつた。

困りはじめた彼は、忠實に働いてゐる弟の僅かな財産に目をつけはじめた。弟はこの横着な兄から搾り取られはじめた。特に兄が弟の顔にかゝはるやうな事をする度に、嫌々ながらも弟は出さなければならなかつた。弟は今猫ににらまれた鼠のやうに、高飛車に禮をも云はれない掠奪に、然念の涙を呑んでゐる。兄は依然として仕事をしやうとは思はない。

日本の失業者幾十万、英國に何百万、獨逸に何百万、米國にさへも百万人、毎日のやうにその數

字がふえる。

我等に職業を與へよ。パンを與へよ。

かせぐに追付く貧乏なし。とは昔の言葉、稼がうとても仕事がない、正に世界的失業の大洪水。

由々しき世界的、國家的危機である。宜しく政治的、經濟的の根本解決を求めなくてはならない時である。

働かんとして職なき人に又何をか云はん。

衣食足つて禮節を知る。大衆を律すべき金言である。

されどさきに擧げたるが如き、實例の幾多を見る。「働かざるものは食ふべからず。」働かないのと職がないのとは、根本がちがふ。田あつて耕さず、畑あつて作らず、人生を懷手して喰ふこと、これ全く飢食であり、罪惡である。

親子不和

『父母教訓する、目をいかり、怒りてこたふ。
言令不利にして違戻反逆す。』

譬へば怨家の如し。子無きに如かじ。』

放蕩息子^{ほうとういっし}の實狀である。

仕事あつて働かず。學校にあつて學ばず。

酒と煙草と活動とカフェー、これ青少年の墮落の入口である。

不良に限つて如何なる教訓にも服従しない。

馬耳東風、親の意見も度重なれば却つて目をいからし、云葉を荒々しく喰つてかゝり、一步すゝ

めば親さえも打なぐる。

まさにこれ仇敵である。

おどしつけ、責めつけて、親から金をとり、渴水の如くそれを使ふ。

することなすこと、親の心を傷つけ、さいなみつき、刻々に暗黒の深淵に没入する。

光明なき生である。不健全なる、無道義なる暗黒の一生である。

『子なきに如かじ』と思ふ親、天下滔滔として年々歳々この親を増しつゝありはしないか。

親子の情は自然である。いづれの國々に子のために泣かぬ親があらふぞ。

時代の違つた古ぼけた親の思想と、むげにかたづけに慈愛に燃える親の愛語に耳をかたむけよ
汝が眞に生きたやがての日、親の云葉の一つ一つが深い感銘をもつて汝の胸に徹して來るであら

う。

X X X X X

二月講演豫定

四日——九日 山口縣美彌郡共和村支部發會大會

十日 全郡於福村安養寺

十四日——十五日 廣島縣豊田郡和木公會堂

十六日——十八日 全郡河内支部大會

二十日——二十二日 沼隈郡千年支部講習會

二十三日 深安郡千田支部講習會

二十四日——二十六日 山縣郡戸河内支部大會

轉換期に於ける信仰狀態の

心理學的考察 (つゞき)

吉 藤 智 水

又ニホメツトに就て例せば、彼は自民族を世界的に發展させやうと、ひたすら神に祈つてゐたが或時神のみ告に、こちらの方向に進めば、必ず發展すると云つたので、その神の言葉を厚く信じ、家來の反對論にも應ぜず神のみ告のままに戰つて勝利を得たと云ふ。

我々は夢を以つて不可思議なる存在とするよりもそれは客觀的世界が強度の意識的反映をなすものと見るのであるが、一方には又かゝる夢が實現するか否かの問題について、支那に於ける陰陽道（おんようどう）日本の易占等々各々専門的立場から考察してゐるが、それに對して亦、宗教哲學、心理學、社會科學、等々と再批判がせられ、眞宗の親鸞聖人の著書の中にもそれに對する文獻が見られるのである

が、こゝではたゞ中樞神經に刺激を與へるとは如何なる意味であるかを『夢』を以つて一、二の例を引いたにすぎないものである。

由來宗教の各宗には『修行』をやる、だから空海の殘した御七日御修法は眞言院の存在を益々意義あらしめものとなつて殘存して居るし、座禪觀念等々の宗教的修行は中樞に刺激を與へつゝあることを意味するものである。此等の悉くは、平素から中樞に刺激をあたへてゐるのであるが、然も自らは心理學的考察に對しては何の理解もなしにやつて居るわけである。

それと又突然に子供とか或は父母、兄弟、友人等々の死に出會つて大いに驚き、直ちに寺參りして法を聞き、鬼が佛に早變りと入信する者もあるがそれは前の宗教的修行が漸次的であるに反し後者は一時的突然的に中樞に刺激が與へられたわけで決して不思議に思ふ必要はないのである。

多くの宗教的信仰狀態の心理學的説明は、甚だ觀念論ではあるがこれ迄述べて來た様に中樞神經に刺激を與へることゝ半意識狀態とが一致した殺那、宗教的信仰の世界に至ることを明らかにするものである。

『この説明が眞宗の正しい信仰状態と何處まで抵觸するものであるかは、眞宗學者にゆだねることにして、私は更にもつと別な立場からの批判が宗教心理學そのものに對してなされなければ、これまで述べて来ただけでは、余りにも觀念論的で、信仰状態として反影する吾人の意識が如何なる客觀的條件と依存關係があるか、判明しなかつたら更に宗教心理學は、吾人の生活に對して貢獻する處はないやうに思ふ。

從つて轉換期における理論の示す處は、あくまでもさう云ふ信仰状態の意識内容として反映する客觀的社會事象が重大な問題となつてくるので、宗教信仰の心理學的考察は、もう一度階級的立場からの批判がせられなければ、階級的意義はないわけである。そのことに依つて更に宗教信仰状態に對する別の視野が開けて來るのであるがその先は一般諸兄弟の省察に俟つことにして私はこゝで筆を置かう。 完

無 相 錄

狂 風



惡人製造の五則

子供の魂は軟らかである。動き易く變り易く感じやすい。一步あやまれば大變なものになる。人の子の親は不知不識の間にこの軟らかな魂の芽をつみとり、傷つけ、萎縮させ、心をとめ、悪くする。どうしたら悪くなるのか惡人製造の方法を考へる。

一。頭から『馬鹿!』『阿呆!』『ボンクラ!』と叱ることである。度々聞かしていると、馬鹿になること、阿呆になること、ボンクラになること確實、もとよく出來てゐた子供がどうかしたことで一週間ほど算術が出來ない、何時も神の如く尊敬する先生が『君は馬鹿だね、お前には算術の頭はないぢやないか』と叱る。子供は催眠術にかゝつたやうと、ほんとに出來なくなる。

私の母は私を打ちなぐつて叱つたが『お前は馬鹿になる』と云つたことはない。昔の先生が作文の評に『文章の天才なり』と書いてくれた。私は嬉しかった。だが其作文の点は八十点だった。

いゝ所をひき出さうとする、親や師の苦心だ。

一。すること爲すこと一つ一つに干渉すること。さうすれば、優柔不斷な無氣力者か、自暴自棄の反抗心にみちた悪者かが出来る。畑の作物は虫がついてゐず、いけない枝がのびない限り、ホツておくこと。角をためて牛を殺すの愚をさけること。

一。善いことをしても賢いことをしても褒めぬこと。子供は極端な見榮坊である。親の一口の褒言葉は、天來の妙音、褒められての感激は他日百倍千倍になつて返る。然し石川五工門は他處の缺をとつて返つてほめられ、聖者源信は十六歳にして宮中に經を講じ、帝より御褒美を賜り有頂天になつた時、名利に墮落せるものとして母に叱られた。ほめると叱るは一体である。『可愛くば二つ叱つて三つほめ、五つ教へてよき人にせよ。』

一。羞恥心を破ること。孟子は『惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。』と云つてゐる。惻隱とはあはれみいためこゝろ、羞惡は惡をはじること、この二つの心が仁義のもの

だといふのである。羞恥心は誰でももつて生れる。しかし惡を行つた時、その全体を白狀させ、更に多數の前に發表し、前科者として冷遇されると、遂にはこの惡を恥ぢる心を失ふ。羞惡心の處女性を蹂躪することほど恐ろしいことはない。惡にむかつて鉄面皮になつた者には、若き日の何處かにその記録がある。他人の過去の惡はかくしてやること。

一。冷たく裁いて愛せぬこと。惡人を作る根本原則である。人は本來惡を好むものではない。善を好みつゝ惡に陥る。其本人さえ如何ともすることの出来ない鋭い心は如何にして培はれるか、冷たき環境で、その心靈の扉をとざすことだ。社會の冷たさが、刻々に鬭争心を生みだす、家庭の冷さが惡人をつくる。眞の人間生活は、冷たき裁きによつて成立しないで、溫き愛が創造する。惡人正機の聖人の世界が、道義から見た人間文化の基調でなければならぬ。

親の心

一月十二日午前三時五十七分、廣島縣河内町では棕梨川鉄橋に於いて列車轉覆の大慘事をおこした。

河内町舉つての獻身的活動を聞いた時、まぶたが熱くなつた。下り列車は二百米の近くで合圖に成功してとめ得た驛員の天晴れのはたらき。わけて痛ましいのは一家五人惡難、東京櫻田小學校首席訓導西山政一氏の一家の最後、故郷佐賀縣にかへり、東京への販途、妻いちは即死、次男政憲は頭部を碎き手當中死亡、長男憲男は重傷、長女はる子は輕傷、政一氏は妻の死は知つてゐたが二男の死は秘して知らせなかつたため、すでに死んでゐることも知らずに、重傷の惱みにうはごと云ひつつ、死んだ我が子の額に手をあてながら、その回復を祈つてゐた。……………人の世の悲惨事

小さい覺悟

くるしいことがある。

デット忍べ、火傷をちつとおさえて忍ぶ時の氣持で、

新しい道がきつと開いて來るから……………

この小さい覺悟が、行詰つた私を何度開いてくれたことだろうか。

禍福

釋尊は説いて云はれる。

迦葉よ。一人の容麗はしい女があつて、着飾つて他の家を訪ねたが。その家の主人は問ふた。

『汝は誰であるか。』

『私は功德天である。』

『何をするのか。』

『私は到る處に寶を興へるのである。』

これを聞いて主人は喜び、その女を客間へ導き、香を燒き花を撒いてもてなした。然るに間もなくして、又一人の女が門前に立つた。まことにいやしい形装で、膚は破れ衣も亦垢ついてゐる。主人は云う。

『汝は誰であるか。』

『私は黑闇天である。』

『何をするのか。』

『私は到る所の家から、その實をなくするものである。』

これを聞いた主人は刀をふりあげて、

『出て行け、行かねば殺す。』

と云つた。然るに女は

『お、汝は愚かな人である。今汝の家にいつたのは私の姉である。私はいつでも姉と離れずにゐるのであるから、私を追出せば一緒に姉をも追出すことになるであらう。』

と云ふので主人は家につけこみ、このことを功德天に尋ねた。功德天は、

『いかにもその通りである。私を愛するならば、妹も愛してくれ。』

と云ふので、主人は遂に二人を追出した。二人の女はつぎにある貧しい家に行つた。そこでは喜んで、二人を内に招じたといふことである。………

親鸞魂に躍る(2)

——歎異鈔を讀みて——

釜 瀬 春 芳

再び信心について

親鸞聖人ほど身を以つて眞實を求めた方も私はあまり多く無いと思ふ。聖人を思ふ時、何よりも強く我々に感ぜられることは、その一生が眞實を求めることに終始してゐたといふことである。

聖人二十ヶ年間の苦悶は眞實を求めることに盡きてゐた。我々はその眞劍そのものの如き求道の中に偉大なる聖人のすがたをしのぶ。枝末諸方の靈觸にまうで、眞の知識を求め、山川草木靜寂に眠る夜半歩みを六角の精舎に運び百夜の間の遺瀨なき祈りそれは眞理を求める悲しき巡禮の姿として今なほ吾々の魂に嚴肅さを呼び醒すのである。

一步も妥協することの出来ない、自己を誤魔化すことの出来ない親鸞は二十有余年間眞實を求め

(讀方)

又言く 我佛道を成ずるに至らば、名聲十方に超ん。究竟して聞ゆる所なくば誓つて正覺を成らじと。衆のために寶藏を開いて、廣く功德の法を施さん。常に大衆の中に於いて、說法獅子吼せん

講 話

重 誓 偈

大無量壽經を拜讀しますと、眞實の本願を五劫の思惟によつて選擇發見せる法藏菩薩はこの久遠の本願を四十八願として説きました。その四十八願がおはりますと。法藏菩薩は重ねて偈頌を説いて其本願を諱にしてゐられます。この偈頌を三誓偈又は重誓偈と申します。

今其本文の初を掲げます。

我建超世願 我超世の願をたつ 必至無上道 必ず無上道に至らん
 斯願不滿足 此の願満足せずば 誓不成正覺 誓て正覺を成ぜず

我於無量劫 我無量劫に於いて 不爲大施主 大施主となりて

普濟諸貧苦 普く諸の貧苦を濟はすば 誓不成正覺 誓つて正覺を成ぜじ

我至成佛道 我佛道を成ずるに至つて 名聲超十方 名聲十方に超えん
 究竟靡所聞 究竟して聞ゆる所くば 誓不成正覺 誓つて正覺を成ぜじ

自利成就の誓

法藏の誓願！ それは大地に念ずる恵みであり、力であります。生きとし生けるもの、背後に念ずる大悲であります。心を靜めて謹みてこの重誓の偈にふれてゆきませう。ひし／＼と我等の乗托すべき力と恵みを感じないではゐられませぬ。佛の正覺は我等の往生であり、菩薩の本願はそのまゝ我等の信であります。佛の念を衆生の念の一体なる所、其處に機法一体、佛凡一体、水もろさらぬ信境が開けます。

『我超世の願をたつ！』

必ず無上道に至らん！

この願満足せずんば

誓つて正覺を成ぜじ！』

何といふ偉大な文字でせうか。佛に成る！法蔵の願心は實にこの『成佛』の二文字につきます。自利満足の世界です。地位に名譽にあらゆる低劣な慾心のために、無自覺な毎日を空費せる我等の現實にこの菩薩の大誓願成就の宣言は青天のへきれきとして、我等の上に大鉄槌を下すの感があります。無上道に至らずば、この一切衆生を救ひ、自ら救はれる大願が満足せずば、誓つて正覺を成ぜじ！我等はこの菩薩の宣言に會ひ、思はず魂のおどるを感じます。

利他成就の誓

次ぎに菩薩は、

『我無量劫に於いて

大施主となりて

普く諸の貧苦を濟はずば

誓ひて正覺を成ぜじ！』

無量劫に永遠に大施主となりて、諸の生死煩惱にからめられた無功德の貧苦を濟はずば誓つて正覺を取らない！

菩薩が自利満足を誓つたのは、利他せんためでありました。大施主です。佛は大施主です。しかも卑しき自樂のみを求める衆生の功利的な欲の満足のためではありません。名をくれません。單なる樂をくれません。食をくれません。衣服でもたして其外の何でもありません。如來は如來それ自身であるところの智慧と慈悲とを廻向します。如來それ自身を衆生に廻向し、如來それ自身が衆生になることによつて、彼は大施主となるのであります。されば彼は又『諸の衆生をして功德を成就せしむ。』と誓ひました。衆生の上に如來を成就し、衆生をして功德を成就せしむることが、佛にあつては正覺であり、衆生にあつては往生であります。一体の中に親が生き子が生きるのであります。されば『諸の貧苦を濟はずば、誓つて正覺を成ぜじ』と誓つたのであります。

救済の方途

然れば菩薩は如何にしてこの誓を満足するか。こゝに第三の誓を聞きます。

『我佛道を成ずるに至りて

名聲十方に超えん！

究竟して聞ゆる所なくば

誓ひて正覺を成ぜじ！』

これこそ、本文にのせましたところの、聖人が引文せられたお言葉であります。即ち第十七願（前号）の心であります。名聲十方にこえんとは、南無阿彌陀佛の名号、名告が十方世界に響流して、よく衆生救済の實を全うせんことを誓つたのであります。如來の本願は、十方無量の諸佛の上に名号の讃嘆を誓ひ、十方無量の諸佛が、壽命無量光明無量の名告をあげることがそのまゝ、彼自身の成就であることを誓ひました。あゝこの無量諸佛の名号の交響樂こそ、莊嚴されたる。全一なる、平等なる眞如界の風光でありました。しかもこの名号を心の耳に聞く時、我等は自然の念佛の行者と

なり、諸佛の名号そのままに我等の太行となつておるのであります。我等はこの名号を『聞』いては大信を抱き名号を現行して太行に生きる、いつしか光明界中の攝取におどろくものであります。眞理は名告る！

見よ阿彌陀經には——『その土に佛まします。阿彌陀と号す。今現在說法したふ。』と過去に佛にあらず、未來の佛にあらず、彼は今現在說法してまします。今現在說法の文字、然り彼は、如何なる時にも、如何なる處にも、そして誰の上にも、名告りつゝある。（この項つゞく）



聖戰錄

河内町

一月一日やつこ日本部にあたけで、二日にはすぐ河内町へ河内支部

も澤山團員が來られて盛會、有意義な御法事である。養藏山の山腹に對して、極めていい風景、四日朝發、一寸途中下車で本部へ。

大野村

即日佐伯郡大野村佛教會館へ、丁度一年ぶりである。四日夜より七日まで、きてみると數年來のおなじみ深い地、夜は若い人で一ぱい、光明團の講演は六ヶしいとの評はこゝにももれず、年老にはあまりすかないとのこと、すかそ

てこれ以上きてもらつては困る。校長竹本久一氏は舊友、實踐的な人、本村の教育のためによるこぶ。この夏に又來ることな約してゐる。

福 山

文化協會、報恩講、十一日夜、十二日は宗教講座、靜かな會、臨時變更があつて兩三日休み。

岡山同心會

十六日石井睦調氏方報恩講、一日なつかしい會合、十七日同心會主催、中島教徳寺に於いて晝夜二回、釜瀬君鳥取より賑る。中島としては來聽多し。十八日書醫師會館において講演會、來聽者中には女子師範生徒三十名ばかりも來聽釜瀬君講題「最初にして最後のもの」住岡「大乘菩薩道の提唱」後松岡旭哲嬢の琵琶「血染の聖典」があり五時閉會、極めて有意義な會であつた。夜同心會の幹部谷本氏宅の報恩講、新築されたお二階に一ぱいの聴衆來會者一同に色々心配される。いつもながら親切なおや飯室支部 十九日松浦そして釜瀬そして住岡は風なればなれに集る。然し松浦氏は風

邪をおして行つたのだがばつたり床について起たない私も風邪をおして起つ、何時もながら支部長末田登氏香川萬兵衛氏、吉政御一家の御心配が強い。二十二日賑る。

大 柿 町

佐伯郡能美島の大柿町大君、更生會二十三日夜より三日四晩、一日三回の講演、鳥は寺院から光明團濟世軍等新興團體の排撃極めてはげしく、純朴な島民たちは私たちの話でもきけばすぐ様地獄にでもおちるやうに考へてゐる。随つて聞き手はいつも同じ人たち、大變熱心なこと、二十七日音戸町藤脇に移つて二日間、座談におくる。島の冬は大變靜かである。「海なきて軍港の空々陽あびて飛行機二台低く舞ひまふ。」(狂風)

春 年 信愛道の提唱——惡人正機道の底徹
芳 願 新社會の創建——大乘菩薩道の提唱
宗教の本質化——自由教團擴張運動

鳥取縣東伯支部

東京時代の親友三人と仲よくお正月の三日間をすごした私は家に

に残しつゝ來客二人をほつたらかして汽車の人となり五日午後二時倉吉驛に着いて見るに親しい六七名の同志の懐かしい顔を見る。早速日中の講座には毎年いづこに行つても思ひだして語る蓮如上人一代聞書にある「道宗念佛申さるべし」といふ文について語る。いつもの如く至れりつくせりの歡待ぶりに大々的宣傳には恐入る。支部長八雲氏は相變らずの元氣ぶり、頭には黒頭巾がのつかつてゐる。ポツリ／＼來つて元氣な話をされる。十年も知己であるがのやうに親しい人々が來て下さる。夜になるさ山陰特有の雨嵐でも熱心な人達は可成り澤山集つて下さる。本年度の年頭希願である信愛道提唱の第一回提唱講演の火蓋を切る。親鸞聖人の他力をたのみたてまつる惡人もつとも往生の正因なりてふ心持を語る。妙寂寺に於ける惡人正機道の處女講演は暴雨について集る同志と共に感銘深く終る六日は東伯支部御正忌の取越、心ばかりの行事がなさ

れた。

淺津村改良組合及青年會

八日夜は團員大前正信氏のお世話で淺津村福

山氏宅にて改良組合青年團主催の下に講演會開催、倉吉より波多野、中井秀野法師と一緒に参り東郷館といふ温泉旅館が宿である。こゝは東郷湖のほとりにある東郷温泉で氣持のいい温泉に入れていたゞいて元氣を快復し夜の講演を待つ、時間が來ると福山氏宅に入るとても大きな家で座る所ない程の集りである。第一團歌高唱について如來について三時間ばかり獅子吼するこゝは香法寺といふ熱心なお寺さんがよく育てあられるので聞きふりがいい。大前正信氏は熱烈な若き求道家らしい村の人々はみんな何となく懐しい人であつた

高城村米積公會堂

晝夜二回の講演である。折廻しく雨なのに聴衆は満堂、少

し話がむつかしいのでもやすくかたる。倉吉から高田の奥さん杉山みどりさんがきて下さつて急に元氣づく。つゞいて夜に入ると波多野先生も倉吉から來ら

れる。講演後は自由質問座談をする。こゝには宮田先生、宮本先生の熱心な求道家がいづも獻身的な御奮闘である。夜十一時自動車で倉吉に帰り波多野先生が心配して特別に用意して下さった家に飯を。外は大變な吹雪で野も山も眞白になつた。十日夜は團員小倉たまえ様のお宅で東伯支部の座談會、何しろ七八寸の降雪である。親しい友達が二十名ばかりお集り下さる。悪人正機を中心に色々な話がはすむ。十二時を過ぎるので別れませうと云つては又話が出る。光明團の會合いつも夜おそくなるので奥様やお母様に大變なお叱りを受けたり出席を禁ぜられたりされるとき。でも座談會なんか終りになるほごいゝ話が出てつい時間がおそくなる。出席されたことのない方には無理からぬことである。たまに三晩か四晩意義ある生活が建設したいといふいちらしい念願から求道されるのですから、御不自由でせうがこらえてあげて下さい。いつつかの日にそれが何かの形で家庭の光りになつて現はれることあると信じます。

ひるの間はみな様の來訪を受けて波多野氏の宅で座談十一日夜、團員有田様の宅で座談 相變らずの大雪で集りは十八九名話の中心は社會と宗教、十二時閉會河原町青年會館 十二日は晝夜二回、晝は信について、夜は青年諸君が多かつたので社會問題と宗教について語る。講演後自由に座談會に花が咲く、十三日朝八時三十分皆様に見送られて米子支部へ……

米子支部

フタバ園。板垣、岡野兩氏に迎えられ佐々木氏のお家に入り、早速晝席より如來とは何ぞや、と題して語る。こゝが二日間。相變らず皆様の元氣がいゝ。會後座談。

法勝寺町西念寺。十五日晝夜二回、支部主催の出張講演、かなりの集り、極めていゝ寺、以後御住職龍谷大教授も本團の爲に御盡力下さる御意向ときく。

寺町萬福寺。やはり支部主催の出講で聴衆もかなりのところ、御住職も奥様も熱心な求道家、十六日晝夜二回愉快に語る。未開の米子支部も隆々發展しつつあ

る幹部諸氏の熱心はいづも變らない。

みな様のお世話になりました。明十七日から岡山にて主管と合流する。山陰よさらば…… 以上釜瀬記

消 息

△住岡主管及び釜瀬氏今度支部發會式を舉る山口縣共和村へ出講中
△山口縣美郷郡共和村に本團支部を設立し二月八日發會式をあげる。刀彌哲夫氏御夫妻の獻身的な活動の賜。△松浦千里氏は飯室支部大會出席風邪におかされて自宅に療養中。
△大阪支部住岡啓三氏は風邪にかゝり重態との打電に本部より母と上阪介抱中なれど漸次恢復中
△千年支部は機關紙「としび」第二號を二月一日發行した大したものだ。

誌代納附者芳名

井上先生	六	福島うめ	六
阿武義一	二	武保二	二
阿武龜藏	三	俵まさ子	二
上利武雄	二	中本むとめ	二
阿代たき	二	中村讓	二
河野琢磨	二	森本末藏	六
古谷校長	二	鮎川松次郎	二
香原金藏	二	五藤重次郎	二
松井末松	二	永倉弘藏	二
石津正道	二	泉本すみえ	二
北本鐵道	二	中丸佐一	二
平重吉	二	山田とくよ	二
近藤みきよ	一	高原毎登	五
土井哲	六	花田しな	六
谷道八十吉	二	栗岡光男	二
岡田たかの	二	加藤祐市	二
栗柄清	二	小田直一	二
正宗止	二	江島正一	二
佐野屋	二	河野與吉	二
加納たよの	二	田邊實雄	二
白石小雪	二	大庭慶文	二
鮎川甲太郎	二	鹿島興市	六
		上利幸雄	六

- | | | | | |
|-----------|--------------|-----------|-----------|------------|
| 一、二 刀彌源治 | 一、二 刀彌勘三 | 一、二 西野太一郎 | 一、二 植田時代 | 一、二 刀彌吾一 |
| 一、二 森本しのぶ | 一、二 鳥賀谷岩雄 | 一、二 沖正美 | 一、二 中桑正邦 | 二、〇 和彌爾 |
| 一、二 前田謙次 | 二、四 大塚徹心 | 一、二 細田校長 | 一、二 藤本哲 | 六、六 鹿島たき |
| 六、六 秋藤文子 | 六、六 鹿島ひさを | 二、〇 岸本哲 | 一、二 藤本さく | 六、六 岡きつ |
| 一、二 神田實 | 一、二 宮崎作太郎 | 二、五 小堀賢二 | 一、二 岡田忠美 | 七、〇 山本さな |
| 一、二 小川才次郎 | 一、二 石井きみ | 二、五 松中ちえ子 | 一、二 大原豊 | 五、〇 杉元つるよ |
| 一、二 上利民正 | 一、二 小田なつえ | 一、二 阿武化十 | 一、二 芝繁 | 二、四 末田登 |
| 一、二 浅杉己盛 | 一、二 桑原達美 | 一、二 政棟政登 | 一、二 門脇利子 | 二、四 東いよ |
| 一、二 齊藤こすえ | 一、二 内本りよ | 一、二 高田しな | 一、二 岡本先 | 一、二 金田初子 |
| 一、二 梅花美粧院 | 一、二 松岡晴二 | 一、二 三田ひさ | 一、二 錦織正太 | 一、二 佐々井かつ子 |
| 一、二 吉政清 | 一、二 廣谷菊藏 | 一、二 小田義助 | 一、二 佐々木殘夫 | 一、二 耕納重孝 |
| 一、二 萬壽惣市 | 一、二 小笠原おしほ | 一、二 福田義助 | 一、二 齊藤答 | 一、二 細川親宗 |
| 一、二 小田長一 | 一、二 神田實 | 一、二 奥迫要 | 一、二 川藤久吉 | 一、二 藤井紹忠 |
| 一、二 片山くに | 一、二 佐々木鐵雄 | 一、二 藤井勝見 | 一、二 道管まさき | 一、二 勝谷壽一 |
| 一、二 鹿島芳彦 | 一、二 三戸鎮雄 | 一、二 藤本ちる | 一、二 上利龜郎 | 一、二 福見八重子 |
| 一、二 伊藤梅彦 | 一、二 山手れい | 一、二 藤本ちる | 一、二 岩崎正男 | 一、二 横井利三郎 |
| 一、二 林孝二 | 一、二 杉山彦平(持志) | 一、二 黒田幸夫 | 一、二 田坂正男 | 一、二 堀野克子 |
| 一、二 田坂将 | 一、二 野座上しき子 | 一、二 清水三太郎 | 一、二 岡本定親 | 一、二 鈴木三平 |
| 一、二 高村とみ子 | 一、二 山岸豊治 | 一、二 黒田幸夫 | 一、二 岡本定親 | 一、二 黒田明 |
| 一、二 小池與三郎 | 一、二 脇本徳雨 | 一、二 黒田幸夫 | 一、二 岡本定親 | 六、六 國廣武逸 |
| 一、二 中尾貞七 | 一、二 齋藤みちね | 一、二 黒田幸夫 | 一、二 岡本定親 | |
| 一、二 小沢豊次 | 一、二 野田四郎 | 一、二 黒田幸夫 | 一、二 岡本定親 | |



▲ 宗教を説いて歩き巡る
説教家を普通一般労働者よりより尊いものと見る偏見、精神を物質より、より尊重する思想が今尙現社會の民衆の頭にこびりついてある。

▲ 説教家の語るを聞いてそれを直ぐ何等批判なしに、己の生活にあてはめやうと(絶對にあてはまらないものでも)あせる素直さがある。その素直さ、よさが説教家のつけめにする、金を搾取するに都合のいい弱点なんだそれに氣附かない哀れさがある。

▲ 殺人的不景氣でもお布施を減すことは何ぞや佛の罰當りでもあるかのやうに思ひ財布の底までたいて喜捨する、よさがある。愚かさがある。

(涙 泉)

昭和六年二月十日印刷納本 昭和六年二月十五日發行	一部 金 十 錢 (郵税共) 一ヶ年金一円二十錢 (郵税共)	編輯兼發行人 花岡 靜 人 印刷 人 佐々木温三 印刷 所 光明團印刷部	發行所 光明團本部 振替下關二三〇八番
-----------------------------	-----------------------------------	--	------------------------